

日文研

2011年9月

no.47

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日文研 四十七号

二〇一一(平成二三)年九月三〇日発行

編集 瀧井 一博

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

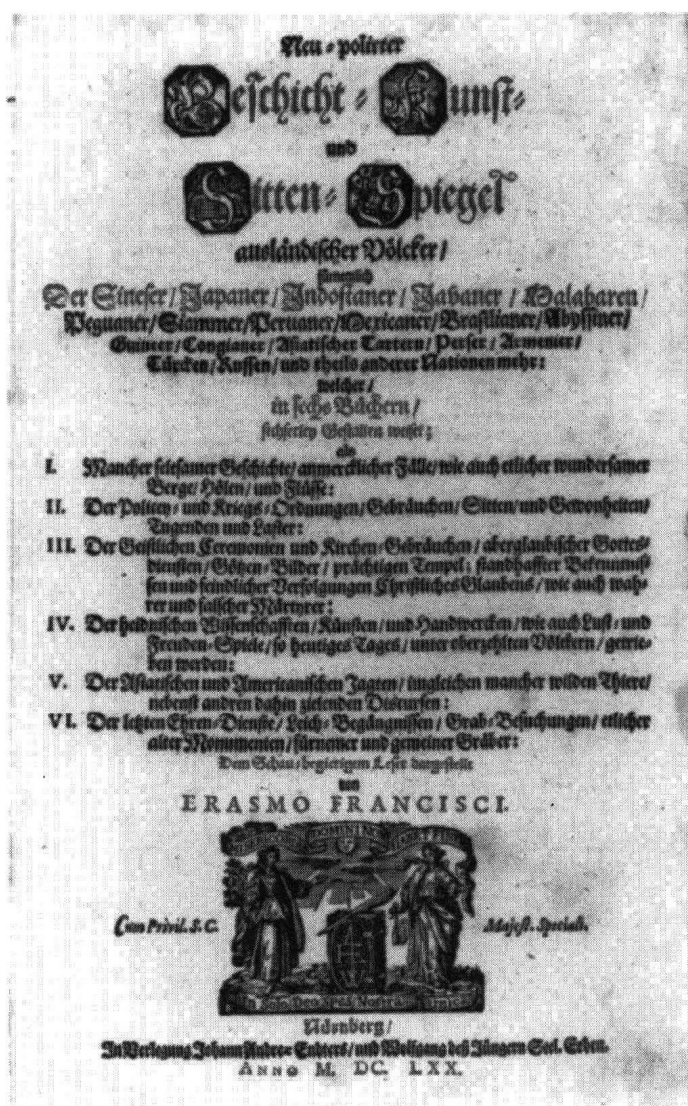
国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



フランシス『海外諸国歴史芸術風俗新鏡』標題紙（ニュルンベルク、1670 年刊）
 フランシスはドイツ最初の職業作家と言われ、17 世紀後半のドイツ上流階級の博学趣向に合わせ、本書において東西インドに関する地理、歴史、植物、動物、民族、慣習などについての様々な珍奇な話を編纂している。日本についても膨大な量の情報を掲載している。

日本文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

常州大学図書館蔵書章

— エッセイ —

磯前順一 被災地より—今、表現の質が問われている 2
 笠谷和比古 楽劇『保元物語—崇徳怨霊譚—』の公演を終えて 7

細川周平 桂坂文部欄 14
 松田利彦 オーストラリア戦争記念館訪問記 19

根川幸男 日本（史）研究と移民研究—日本研究の裾野と可能性を広げるために— 25
 ロー・ダニエル 感情の風化 32

— センター通信 —

鈴木貞美 日本関連在外資料（近現代）調査研究プロジェクトについて 38

共同研究 42
 基礎領域研究 58
 彙報 60
 所員活動一覧 70

エッセイ

被災地より——今、表現の質が問われている

磯前順一

重油まじりの潮の異臭が鼻をつく。海風に吹かれて、路上から砂塵が舞いあがる。眼前には瓦礫の山が広がる。いたるところで横転している大破した自動車。残骸と化した家の二階には船が突き刺さったままだ。子どもが描いた家族の似顔絵、手作りの果実酒が詰まった瓶、変形した鍋やフライパン。津波に襲われる瞬間まで生活していた痕跡があたり一面に散乱している。しかし、重機を操る数人の作業者を除けば、まったく人の姿を目にすることはない。上昇したままの海面。いまでも満潮時には廃墟と化した町は冠水を被っている。

人口の約一割五分、およそ千五百人が死者・行方不明者となった宮城県女川町。交通の不便さからか、メディアによって報道される機会はほとんどない。三陸から茨城県北の海岸部にかけては、依然として孤立状態に置かれた集落も少なくないという。

もちろん、福島第一原発の問題に典型的にみられるように、今回の一連の災害をとおして何がどのように破壊され、将来にどれほどの影響を及ぼしていくことになるのか、それを正確に把握している人間など世界中に一人として存在しない。現実そのものは、実際に事態は今そこ

で間違いなく生起しているものであるにもかかわらず、当事者もふくめ、私たちはその一部の断片化された情報から解釈をそのつど組み上げていく他にない。ただ、わたしたちが思慮深くあろうとするならば、その組み立てられた解釈が現実そのものではないことを自覚し、自分たちを覆う象徴界の固定化された意味のなから、その表面にかすかに刻み込まれた亀裂をとおして現実の解釈を読み換えていこうと試みなければならぬ。その点からいって、私たちはテレビの画像をはじめとするメディアや政府、あるいは東電の流す情報をつねに一定方向に偏向されたものとして批判的に読み解いていく用心深さを持つていなければならない。テレビに出てくる原子力研究者のほとんどが原発推進派であり、政府や電力会社と密接な利害関係を有する連中であることを、学問のもつ政治性を暴いたカルチュラル・スタディーズを学んだ私たちは十分に承知しているはずである。

被災地の現場に漂っている異臭はけっしてテレビの画面からは伝わってこない。匂いというものは眼前に広がる光景が現実の世界にはかならないことを、それがまぎれもなく生身の人間が存在していた世界であるという事実を、嗅覚をつうじて私たちに突きつけてくる。避難所をおとずれた私は、そこでトイレを使用させてもらった。屋外にビニールで囲われた簡易トイレが何基も隣接して立てられている。自分の排泄の音も、他人の排泄の音も否応なしに耳についてしまう。便壺からは、黄色や茶色の汚穢物がすぐそこまであふれ出ている。据え付けのレバーを使って、その便壺をかき混ぜながら、わたしは用を足した。避難所で暮らすということ、このようなトイレに一日に何度も通い、排せつするたびに他人の汚穢物をかき混ぜながら、その異臭を吸いこむということなのだ。

さらに、被災地に救援に入った周辺地域の人びとから話を聞くと、報道規制によってテレビ

の画面や新聞の写真には映し出されなかったが、震災からしばらくの間は瓦礫の間から手や足の出た多数の死体がいたと目についていたのだという。もちろん、被災者をはじめとして現地の人たちは、そのことについてほとんど語ろうとはしない。語ることを身体の次元から無意識的に拒絶してしまうほどに、過酷な現実が彼らの眼の前には存在していたのだ。あまりに無残な現実を体験したとき、人はトラウマにとらわれ沈黙の底へと沈みこみ、言葉を失ってしまう。

そのような匂いや身体的な感覚といったものは、テレビの前でいくど繰り返し津波や瓦礫の映像を見ている、けっして自分の身体から湧き起こってくる反応ではなかった。しかしここが肝心な点であるが、被災地に赴いたからといって、彼らの話を直接聞いたからといって、わたしが被災した人たちの感じている苦しみや戸惑いを共有したことはない。むしろ、この災害は「私」ではなく、まぎれもなく「彼ら」に起きた出来事であるという事実を、自分の身体感覚を通して思い知らされたというべきであろう。一度や数日間体験したからといって、自分の日々の暮らしが被災地の外にあるわたしには、被災者の苦痛や悲哀までを同じ当事者という立場からはけっして理解しえないのだ。「サバルタンは語れない」というガヤトリ・スピヴァクの言葉が、私の脳裏をよぎった。もちろん、誰もが相対的な関係性のもとではサバルタンになりうる可能性を秘めている。同じように、誰でもが「悲惨な者、抑圧された者」としての人民―その最たるものとして人権を失った「難民」―にも転落しうるのだ。そのような転落は、偶発的なものでしかない。今回の災害についても、東日本大震災は東南海道大震災であったかもしれないし、福島第一号原発の起きていることは柏崎刈羽原発に起きたことであつたかもしれない。

しかし、偶然に基づくとはいえ、生き延びた者は、死んだ者とは絶対的に異なってしまう。あるいは家族を失った者は、失わないで済んだ者たちとは全く違う状況下に置かれてしまう。客観的にみれば偶然に起きた出来事でも、その出来事に巻き込まれた本人にとっては不可避な事実になってしまうのだ。そして、この必然的な偶発性、あるいは偶発的な必然性が、地球上や日本の内部に埋めがたい地域格差を作り出してしまふ。さらには、東北地方の内部でも格差が生じていく。地震と津波を同じように被ったとはいえ、依然として原発問題を抱える福島県と岩手・宮城県では状況は異なる。同じ石巻市でも、ライフ・ラインがほぼ復旧されて自分の家に戻れた人たちと、今なお避難所に住まざるをえない人たち、いまだ家族の遺体さえ見つからない人たちといったように、被災地のなかでも人びとを取り巻く状況の違いがはっきりと出てきてしまっている。

このような現実に生起してしまった状況の相違いを意識すればするほど、わたしたちは安易に「がんばれニッポン」や「がんばれ東北」といったフレーズを口にすることが憚られるようになるだろう。実際のところ、この「がんばれ」といった言葉の主体は誰を指したもののなのだろうか。ほんとうに頑張らなければならないのは、日本全体や東北地方全体なのであるのか。たしかに、経済活動における生産地と消費地の依存関係、あるいは生産の地域的な分業体制からみて、この災害は直接の被害地に甚大なダメージを与えたのみならず、日本の経済システム全体に甚大な影響を与えていることは周知の事実である。しかし、結局のところ、誰よりも頑張らざるをえない状況に置かれてしまったのは、やはり家族や財産を失った被災地の人々であることは明らかである。それに対して、被災していない人びとは、被災地に対する経済・物質的な援助をいとわないにしても、やはり当事者と同じ目線に立つことはできない。当たり前の

ことではあるが、「わたし」は「彼ら」と同じではないのだ。

この現実をはっきりと自覚するとき、異なる状況に置かれた個々の人間を、同じ「日本」や「東北」といった固有の名のもとに同一化することが現実の不平等さと不均質さに目を覆う乱暴な行為であることは明白になる。そのような不平等さを隠蔽するかのように、美辞麗句に満ちた日本人論が跋扈しているが、私たちはそのようなナショナリズムに決して与してはならない。実際に被災地に入って見れば、たしかに一方で「秩序、道徳、譲歩の精神」にみちた「自己規律的規範」が人びとの行動をかなり統御していることが見受けられる。しかし、その一方で、プライバシーのない狭い場所ですべてを送らざるをえないために、日々些細なことから日々生じる諍い。なぜ、テレビや新聞はそのようなトラブルに現地の人たちが苦しんでいることを報道せずに、日本人が、思いやりがあり自制心を有した国民であるという美談ばかりを報道したがるのであろうか。それで被災者の人たちが現実に苦しんでいる問題が解決するとも言えるのだろうか。

浮遊する知識人のような表現者である「わたし」と、地域の絆に良くも悪くも支えられて生きていく「あなた」。その違いの存在。それは私たちに「共同性」とは一体どのようなものなのか、少なくともこれからはどのようなものとして構想されていくべきものなのか。これらの問題について、各自の置かれた立場の違いを超えたかたちで、あらためて再考を促すものとなる。不確かな現実のなかで、確かな未来をつかみ取るために、いまこそ私たちの表現行為は他者に向かって働きかけていく必要がある。けっして安手のセンチメンタリズムに流されてはならない。今こそ、表現というものの質が問われているのだ。

日本の社会は今回の災害という今も続く一連の出来事を通して、国際社会に貢献することの

できる表現の重さを手に入れたこともまた確かな事実なのである。ジョルジョ・アガンベンが述べているように、例外状況のもとでこそ、固定化された主体の脱臼は起こりえたものなのだ。最大の危機は最大のチャンスでもある。

(国際日本文化研究センター准教授)

楽劇『保元物語—崇徳怨霊譚—』の公演を終えて

笠 谷 和比古

本年(二〇一一年)の四月二三日(土)、西宮市にある兵庫県立芸術文化センター・大ホールにおいて「楽劇の祭典」十周年記念特別公演として楽劇『保元物語—崇徳怨霊譚—』を上演した。筆者は本作品の作・脚本を担当するとともに、その制作全般にかかわった。

「楽劇の祭典」は日本の三大楽劇^{がくげき}である能・文楽・歌舞伎を基軸とする舞台芸術の祭典であり、毎年一〇月、十一月の時期に関西一円において開催してきた。筆者はその創設の二〇〇一年以来この活動に携わってきたが、幸いにして大方の御支持と御協力を得られたことから「楽劇の祭典」は連年にわたって開催され、昨年一〇月には十周年目にあたる恒例フェスティバルを無事終了することができた。そして今回の『保元物語』はこの「楽劇の祭典」十周年を記念した特別公演であった。

本作品はいわゆる「崇徳怨霊譚」のスタイルをベースとしている。一二世紀、院政の時代に、皇位をめぐる争いに源平の武士が動員されて内乱に発展した保元の乱で敗れ、四国松山の地に流された崇徳上皇が、度重なる帰京の歎願もむなしく却けられる中で、遂に生きながら天狗の姿となり、この世を破滅に導くとする呪いの言葉をはいて彼の地で没した。その後、崇徳の墓を訪ねた西行法師の前に崇徳の怨霊は現れ出で、それより両者の間で壮絶な対決が繰り広げられる。

これが崇徳怨霊譚として世に知られるものであり、古典の『保元物語』に記されてのち、『平家物語』にも収載され、また能『松山天狗』としても作品化され、江戸時代に入っては上田秋成の『雨月物語』の第一話「白峰」や滝沢馬琴の『椿説弓張月』など数多くの作品に描かれている。

今回の作品は、その主題においてこれら古典的な怨霊譚とは少しく趣を異にしている。本品では角田文衛氏らによる現代の歴史学的研究（『待賢門院璋子の生涯』など）の成果を踏まえて、崇徳の出生のあり方に注目し、崇徳の悲劇と怨念の物語がここに胎胚しているという理解のもとに構成されている。すなわち、崇徳は鳥羽天皇と中宮待賢門院との間の子とされているが、実際には鳥羽天皇の祖父にあたる白河法皇と待賢門院との間に設けられた子というストーリーである。

待賢門院璋子は権大納言藤原公実の女子であるが、幼い時から白河法皇の下で育まれてきたという経緯があり、当時から両者の親密な間柄については、とかくの噂も流れていたようである。そして他ならぬ鳥羽が崇徳のことを「叔父子」と呼んでいたという言い伝えもある程であった（『古事談』）。

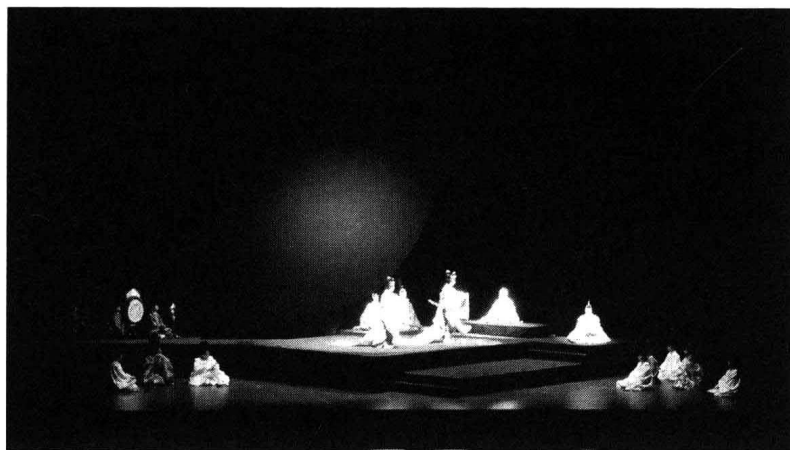
この問題を導入するならば、崇徳怨霊譚は旧来のそれとは違った意味合いを有することとなる。旧来の構図では、崇徳の怨念と憤怒というのは、政治的抗争に敗れた崇徳が、四国の幽囚の地で恨みを抱いて没し、死後に怨霊となって祟りをなしたということで、菅原道真などと等しく、日本における怨霊の現れ方の典型をなしていると言つてよいであらう。

しかしこの「叔父子」の問題を導入したとき、崇徳怨霊譚はこれまでの古典的な表現とは大きく異なる様相を呈してくる。問題は崇徳自身であるよりも、むしろ白河法皇に帰囚することになる。専制権力者である白河法皇の権勢と放縱と色欲、それが崇徳の誕生につながり悲劇を形成していくとする、という流れが物語の本流をなすこととなる。

崇徳の悲劇と憤怒は白河法皇の放恣と業欲の帰結として捉えられるが、この物語のより根源的な意味として、白河法皇に体现される人間そのものに根ざした強欲、権力欲、色情の欲といった業因の所産として崇徳の悲劇を位置づけるとする理解である。本作品の末尾において、崇徳怨霊が「人間の、この世にあらむ限り罪業尽くることなし。罪業尽くること無くんば、魔縁の恐怖もまた永劫なり」と宣告するのはこのことを指している。

このように捉えるならば、楽劇『保元物語』の主題は怨霊論であるよりは、むしろ原罪論であることを諒解されるであらう。原罪論は言うまでもなく、キリスト教神学の根本教義であり、アダムとイブの失楽園の物語から始まって、最後の審判によって全人類が裁かれ永遠の天国と永遠の地獄墜ちが決定されるとする構成をとっている。

筆者が崇徳の物語に見いだしたのは、このような原罪論にかかわる問題であった。しかもこの原罪論を仏教的（東洋的）に捉えたならば、どのような展開を示すであらうかという関心であった。本作品の第三場における崇徳と西行との対決は、この原罪論的テーマをめぐる葛藤で



第二場第一景「白河法皇御所、青海波の舞」

あった。本作品のような試みに、なにがしか意義があるものか否か、それはご覧になられた方々の判断にゆだねる他はないであろうが。

作品の主題についてやや贅言を連ねたが、今回の作品ではむしろその様式面において新機軸を諸多にわたり打ち出している。まず作品の基本様式であるが、その全体を能の伝統的な様式で構成しながら、演出面および音楽面において西洋のオペラ、ことにワグナー楽劇の様式を導入し、もって両者を統合した新たな楽劇空間を創出することを目指した。

すなわち一幕形式（途中休憩をはさむ）で全三場からなる構成をとる。第一場は四国讃岐白峰の崇徳陵墓の前で、都より来たった西行が読経するシーン。そこへどこからともなく現れ出でた土地の男と問答となり、男が崇徳の往事のあり様を物語るといふのは能の典型的なパターン。やがて男は、われこそ崇徳の亡霊と名乗ってその怨霊の姿を現す。

能ではそのまま後場に入っていくところで



第二場第三景「保元の乱、夜討詮議」

あるが、本作品ではここから回想シーンとしての第二場となり、崇徳の出生の経緯から保元の乱と崇徳の四国幽囚までの展開が、三つの景として具象的に表現される。最も演劇的でありオペラ的な場面である。そしてそれを踏まえて第三場へと移行し、第一場の末尾につながる形でそれより崇徳怨霊と僧西行との対決の場面が繰り広げられるという構成を取っている。

今回の公演では、これまで『空海』『陰陽師』『河勝』といった数々の新作能の初演に意欲的に取り組んでこられ、国の内外で活躍を続けておられる能楽界の鬼才、梅若玄祥（六郎）氏に、主演とともに演出面からも登場人物の所作と舞と装束とを担当していただいた。

そしてドイツ・ドレスデンの出身でドイツ国内を中心としつつも欧米の劇場、歌劇場で広く演出の活動に携わり、ワグネル楽劇のメッカであるバイロイト祝祭歌劇場においても故ヴィーラント・ワーグナーとともに仕事

をされた経歴をもっておられるマンフレート・フープリヒト氏には、その特有の照明技法をもつて専ら舞台構成の面を中心に総合的な演出をお願いした。

この御両者の協同によって舞台構成面における能楽とオペラ（特にワグナー楽劇）との統合という課題は、かなりの程度まで達成されえたのではないかと思っている。人物と事象の双方にわたり内面的な彫琢に意を用いるワグナー楽劇の照明法と舞台造りとは、能楽の静的で重厚な本性と誠によい調和を示しており、能楽の所作と舞台構成の妙味を一段と際立たせる効果を發揮していたと思う。また能装束の美しさが、彫りの深い照明技法を用いることによって一段と鮮やかであったことを賞賛された向きもあった。

舞台構成のみならず音楽においても、伝統的な能の音楽と西洋管弦楽との協奏を試みている。この部面では新進作曲家武内基朗氏たけのうちにともきの貢献が大であり、入念に研究しつくされた楽曲分析を踏まえて、西洋管弦楽と謡曲および能楽囃子の音楽との間に見事な調和を形成していた。

実は武内基朗氏には、日文研の伝統文化プロジェクトにおいて四年前から、西洋管弦楽と能の音楽との協奏をテーマとしてセミナー的な公演会を担当していただいていた。そこにおいてこの協奏をめぐる問題点を確認し、またその解決の方途についてさまざまに実験的な取り組みを行っていたのである。

能楽と西洋音楽とのコラボレーションは、まるで最近のトレンドの一つになってしまったかのように各地でよくみかけるけれども、この両者の協奏は決して簡単なものではない。両者は拍節の構造を異にし、音階も音律も別にする。その考慮無くして両者を安易にあわせるならば、あたかも刺身とステーキを食い合わせるようなもので、音楽的障害を起こさない訳がないだろう。

伝統文化プロジェクトでは、この本質的な障害をどのようにすれば克服することが可能であるかという観点から、たとえば能楽『小鍛冶』を素材として、それをオーケストレーションした場合に発生する諸問題を綿密に検討するなどの作業をとおして、能楽と西洋管弦楽との調和点を探究してきた。

今回の楽劇『保元物語』では、その成果を反映した作曲がなされており、その意味において伝統文化プロジェクトの活動を支えてもらっている日文研および京都市・京都市文化芸術協会に対して、この場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第である。

さてこのような実験的な試みにみちあふれた本作品であったが、終わってみての観客の方々の反応も多岐にわたっていた。面白かったといって賞賛してくれた方々、ただ長いだけで苦痛の二時間余であったと非難される方々。オペラとの統合と聞いて華やかなイタリアオペラ風を期待されていた向きからは、どこがオペラだとお叱りを蒙った。面白いと評価してくださった側も、能の魅力が理解できたので古典的な能を見なくなった、照明技法の美しさに酔いしれた、囃子方の迫力ある音楽に感激した、能の音楽と西洋音楽との統合調和を讀みたいといった風に千差万別であった。

この種の実験的上演には毀誉褒貶はつきもの。多くの方々の御意見を糧として、今後ともに楽劇活動を続けていきたいと思っている。

(国際日本文化研究センター教授)

桂坂文部柵

細川 周平

最近のインターネット検索は時に、思わぬ拾いものに会おうきつかけを作ってくれる。先日、日文研図書館のサイトで、間違って「桂坂」と入れたら（バスの時刻表を搜していたのだが）、『桂坂文部柵』という浄瑠璃本にヒットした。素人でもこれがお半長右衛門の心中物『桂川連理柵』のパロディであることはわかる。文楽上演を数年前、大阪で見だし、話の発端にあたる滋賀県の石部宿を、草津線鉄道の旅ついでに観光したこともある。好奇心が湧き、借り出して読んでみた。

幕末。洛中で和塾を開く猪屋徳兵衛は長崎に蘭書を購いに行った下向、茨木の宿で、住吉神社参りの帰りという美しく聡明な少女お武と知り合う。お武の父は琴棋書画をたしなむ文人肌の漢方医で、錦小路の貸本屋のバトロンでもある。旅先の気楽さから話し出すと、親子の家は塾から遠くないという。父親は徳兵衛の名声も聞き知り、儒学は呪学と馬鹿にする開明派で、娘の学問には好意的だ。いずれ勉強にいらっしゃいと徳兵衛は別れの言葉をかけ、親子は去ってゆく（序 茨木宿屋の段）。

徳兵衛は代々医方の家系だったが、先代は「解剖」を「海防」と取り違えたことから経世論を修めた。その血筋を引き、学芸百般に通じる都きつての切れ者と評判の学者で、和学にも漢学にも蘭学にも通じ、上方の適塾にも負けぬ学びの場所を都に作ろうと意気込んでいる。道真